

人物紹介

有馬 英二

北海道大学 山本 健一

有馬^{ひでし}英二先生は明治16年福井県三国町の医家栗山家次男として誕生、5歳で母方の親戚の同県丸岡町の有馬家の養子となられた。福井中学から金沢の四高に進学、西田幾太郎先生にゲーテのファウストの講義を受けられ、また、ボートの選手で4番を漕がれたという。

日露戦争の中で東大医学部に入学。向上心、研究心に燃えておられた先生は初めて学問を見詰め、科学の進歩を知り、早く研究者として真理の探究に没入したいという潜在意識が鬱然と湧いてきたと後年述懐されている。

明治41年12月卒業、青山内科に入局、既に熊谷岱藏、呉建の諸先輩が居られた。5年在局後、31歳で朝鮮総督府医院内科に赴任、2年半後の大正5年春、1年間独仏英米へ出張。帰国後は朝鮮総督府医院第2内科科長として御活躍。若き日の異文化に接した7年間の京城生活を離れ、大正10年11月から昭和21年3月まで北大での25年は御生涯の最盛期で、学会に尽くされた凡てで、また北海道に貢献された足跡でもある。

先生は11月1日、内科・外科・産婦人科で発足した北大病院長として開院式を行い、翌日から医局員6名で診察を開始。患者は全道から集まり、その混雑は名状し難いものであった。やがて入院した重症患者は検査も充分受けず次々と死亡。死亡例は剖検する主義であったが、病理解剖の教授は外遊中で、先生が剖検された数は約半年で50体くらいであったという。翌年、助教授の小田俊郎先生が着任。大正15年、北大1期生の入局で医局は次第に充実した。当時日本の結核の死亡率は大正7年にピークに達し、北海道では昭和初期に全国を超えた。従って有馬内科外来では重症肺結核が過半数を占めていた。当時他大学で結核を専攻していた人はいなかったのので、先生は結核に主力を注がれた。

先生は北大赴任前、ドイツの結核病学会で肺X線写真の鮮明なことに驚き、赴任後、X線写真の撮り方に苦心され、遠距離撮影を考案、昭和4年、先生が結核病学会長をされた時、多数の写真を供覧し結核病巣診断法に画期的な進歩、発展がもたらされた。

また、北海道の結核罹患の高度な原因を研究すべく、原住民の日高、旭川のアイヌ民族、さらに樺太のヤク



ト、ギリヤークなどの少数民族の結核調査が行われた。

昭和4年、結核の疫学的研究で北大医学部学生の検診を実施、昭和12年、日本学術振興会結核予防分科会のメンバーとなられ、翌年札幌、函館、旭川の中学生にBCG接種を行い後年の技術院賞受賞につながった。

こうした先生の御薫陶により有馬内科から結核予防、治療にあたる多くの優秀な人材が輩出し、道内の健康相談所、結核療養所で治療された。

昭和14年、先生は日本内科学会の会頭となられ、前々年の日本レントゲン学会、前述の結核病学会と併せて御専門の3学会を主宰されたのである。

同年、阪大の今村荒男教授、東北大の熊谷岱藏教授と相談され、東大の坂口康藏教授と共に雑誌「結核の臨床」を創刊された。敗戦時空爆で中断したが、後に胸部疾患全部を包含する「日本胸部臨床」となった。

また同じ昭和14年、先生は熊谷教授が東北大学に抗酸菌病研究所を生命保険連合会の寄付で設立すると聞かれ、北大にも結核研究所をと生保連合会長に会われ、2年後の設立の承諾を得られたが、ほどなく沙汰止みとなった。ところが先生の御長男洋さんが翌年1月5日、

北大山岳部員として日高ベテガリ岳登頂中、一大雪崩で同僚と共に亡くなられた。医学部3年目の洋さんは先生からクロー・ベルナル著「結核の始発と停止」の翻訳を命じられ、ほとんど終わりになっていたので、先生は寸暇を惜しみ閲覧校正され、南江堂から出版された。この出版に大きな意義を感じ、さらに努力して結核研究所を建てようと決心。翌年春、北方結核研究会を発足させ、基金の第1号に奥様と1万円を寄付、先生の道内外の知己の財界人の寄付、先生が樺太医専校長を兼任されておられたので樺太への往診が縁で全島民の寄付など5年間で45万円に達した。そこで北大医学部に借地、戦中の建築資材、大工、石工獲得に大変な苦労を重ねられ、2階建450坪の建物の落成が昭和20年8月上旬に見られた。しかし研究室は未整備で、BCG製造と頒布のみで研究所はスタートした。翌年、先生は定年を迎えられ、わが国の敗戦の責任は科学に無知な政治家にもありと断じ、科

学者の国会進出が必要と一夜にして決心され、無謀と思われた総選挙に出馬、勝利されたが1年で国会は解散。その後の3年間は全道の精力的な巡回診療によって北方結核研究所の維持と基礎を確立し、北大への移管の道筋をつけられ、昭和25年度文部省予算計上で先生の10年の御苦勞が結実したのである。

そこで再度国会で9年間参議院議員として御活躍、なかならず厚生委員会理事として、結核予防法の成立には大奮闘をされた。

その間、北方結核研究会を東京に移し、中央結核研究会会長として富坂診療所、本郷病院の運営など終生結核と離れることなく、昭和45年4月6日ご逝去された。

〔参考文献〕

有馬英二：「わが77年の歩み」. 昭和36年.

「有馬記念医学財団40年の歩み」. 1982年.